

震災後文学論序説

——芥川龍之介・川端康成・梶井基次郎

野 中 潤

れば、芥川龍之介が「ぼんやりした不安」を感じて自殺を選び取った原因の一つに、関東大震災という出来事を想定することも可能であるはずだ。

関東大震災と芥川龍之介
昭和文学のはじまりを象徴する出来事として、関東大震災と芥川龍之介の死をあげることができる。大正十二年九月一日と昭和二年七月二十四日。一九二三年と一九二七年。およそ四年の時を隔てた二つの出来事は、一見まったく無関係にも見える。しかし、二〇一一年の東日本大震災から三年を経た二〇一四年という時点で立ってみると、二つの出来事が無関係だと考える方が不自然なのではないかとも思えてくる。

「ぼんやりした不安」という言葉を遺した芥川龍之介の自殺の原因については、これまでにもさまざまに議論されてきたが、どのような原因を想定するにせよ、「だから自殺した」と単純に結論づけることはできないだろう。「或旧友へ送る手記」(『東京日日新聞』一九二七・七・二五)に書きつけられているように、「生活難とか、病苦とか、或は又精神的苦痛とか、いろいろの自殺の動機」などと列挙するほかにはなく、大半の自殺は、たとえ引き金となる出来事を特定できたとしても、それだけが理由であると断定できるほど単純なものではないはずである。そこにはおそらく、本人にすら意識できない要因が横たわっている。だとすれば、芥川龍之介が「ぼんやりした不安」を感じて自殺を選び取った原因の一つに、関東大震災という出来事を想定することも可能であるはずだ。

たとえば、「大震災雑記」(『中央公論』一九二三・一〇)の中で芥川龍之介は「焼死した死骸を沢山見た」と語り、浅草仲店の収容所にあった印象的な死骸にまつわる挿話を書き留めている。焼け残った「メリンスの布団」に足を伸ばし、覚悟を決めたようにゆかたの胸の上に手を組み合わせた「病人らしい死骸」である。苦しみ悶えた様子も見せず、唇に微笑を浮かべているのではないかと思えるような静かな死骸のたたくまいに芥川龍之介は感じ入るのだが、「それはきつと地震の前に死んでゐた人の焼けたのでせう」という妻の一言で「小説じみた僕の気もち」が興醒めになるといふ話だ。対象を描写する近代的な口語体による淡々とした文章の中にむしろ、震災後の現実

に向き合いながらも作家としての矜持を保とうとする芥川龍之介の不安定な魂が感じられる。

同じく震災直後に書かれている「大震日録」『女性』一九二三・一〇」と「大震に際せる感想」『改造』一九二三・一〇）では、一転して文語体が駆使されている。ただし、日記という体裁ゆえか、前述した「大震雑記」と同じように比較的淡々と綴られている印象の「大震日録」に比して、「大震に際せる感想」の書きぶりには激しい感情の起伏が見て取れる。

日比谷公園の池に遊べる鶴と家鴨とを食はしめし境遇の惨は恐るべし。されど鶴と家鴨とを、——否、人肉を食ひしにもせよ、食ひしことは恐るるに足らず。自然は人間に冷淡なればなり。人間の中なる自然も又人間の中なる人間に愛憐を垂ることなければなり。

鶴と家鴨とを食へるが故に、東京市民を獣心なりと云ふは、——惹いては一切人間を禽獣と選ぶことなしと云ふは、畢竟意気地なきセンチメンタリズムのみ。

自然は人間に冷淡なり。されど人間なるが故に、人間たる事実を軽蔑すべからず。人間たる尊厳を抛棄すべからず。人肉を食はずんば生き難しとせよ。汝とともに人肉を食はん。人肉を食うて腹鼓然たらば、汝の父母妻子を始め、隣人を愛するに躊躇することなかれ。その後尚余力あらば、風景を愛し、芸術を愛し、万般の学問を愛すべし。

この部分は、「地震のことを書けと云ふ雑誌一つならず。何をどう書き飛ばすにせよ、さうは註文に応じ難ければ、思ひつきたること二三を記してやむべし。」と書き出されているのだが、震災後の東京の酸鼻を極めた現実の中で、職

業作家であるがゆえに書くことを強いられる芥川龍之介の、憤怒に似た懊惱が伝わってくる。

「大震に際せる感想」は、「この大震を天譴と思へ」と言った渋沢栄一に対する反駁をモチーフとしていて、後半部には次のような言葉も書きつけられている。

誰か自ら省れば脚に疵なきものあらんや。僕の如きは両脚の疵、殆ど両脚を中断せんとす。されど幸ひにこの大震を天譴なりと思ふ能はず。況んや天譴の不公平なるにも呪詛の声を挙ぐる能はず。唯姉弟の家を焼かれ、数人の知友を死せしめしが故に、已み難き遺憾を感じるのみ。我等は皆歎くべし。歎きたりと雖ども絶望すべからず。絶望は死と暗黒とへの門なり。

この小文を「同胞よ。冷淡なる自然の前に、アダム以来の人間を樹立せよ。否

定的精神の奴隷となること勿れ。」と結んだ芥川龍之介自身が、皮肉にもわずか三年後に「否定的精神の奴隷」となり、「死と暗黒への門」をくぐったことを考へれば、これらの激しい言葉の中にむしろ、書き手の精神が深刻な危機に瀕している兆候を読み取らなければならないのかもしれない。

震災後文学としての「浅草紅団」

一九二〇年代末の浅草を舞台に、都市の周縁を生きる不良グループの少女弓子を追いかけるながら、最先端の時代風俗を活写した『浅草紅団』（先進社 一九三〇・一二）は、川端康成が生み出したモダニズム文学の傑作と目されてきた。ただし、「浅草紅団」に活写されている風俗描写には、「モダニズム」という言葉でくくるのがためらわれるような風変わりなものが目立つ。たとえば、当時のモダニズム建築で多用された新しい資材

である鉄筋コンクリートで造られたものとして登場するのは、次のような建造物である。

吉原近くの小さい公園——といふ程のものでなく、貧しい町の子供の遊び場だ。子供が二三人で、その共同便所を掃除してゐた。こんな綺麗な共同便所を、私は見たことがない。
「君達、こんなところを掃除するの？」

子供はげんさうに私を見る。

「毎日？」

「ええ、時々。」

「どうしてね？ 言いつかるか、頼まれるかしたの？」

「いいえ。」と、子供達は目顔で呼び合つて、こそこそと立ち去つてしまつた。そこで、公園の子守娘に聞いてみると、

「好きなんでせう、あれが。——自分

の家よりもずっとモダンだし、あんな立派な家が使へるの、便所しかないから、いい気になつて、掃除してるんでせう。」

「コンクリートの便所」が描かれているのは、たんに当時の最先端風俗としてのモダニズムを象徴する光景として選ばれたからではない。この場面の後で「浅草新八景」の有力候補として「私」が列挙するのは、「コンクリートの言問橋や隅田公園」、「鉄筋コンクリートのビルディング、地下鉄食堂」、そして「コンクリート建てに、鉄棒の牢格子のやうな扉の寺——広小路の突き当りに今普請中の専勝寺」などである。このような鉄筋コンクリートで造られた建造物への拘泥には、震災後という時間がくつきりと刻印されている。しかもそれは、震災からの復興を象徴する肯定的なものであるというよりもむしろ、震災後になお人びとの心に

残るトラウマを逆照射する光源としての意味を持つものである。つまり、子供達がコンクリートを偏愛し、便所掃除に熱心に取り組むのは、数年前に起きた関東大震災を体験しているからに相違ないのだ。便所掃除をしている子供達は、おそらく自分が住んでいた木造家屋を地震で失っているはずである。自分を守ってくれていた両親や、共に生きてきた兄弟などの家族を亡くしている可能性も高い。

地震によつて倒壊したり、その後の火事によつて焼失したりした木造家屋のもろさと、自分を庇護してくれる存在のほかなさを知っている子供達だからこそ、揺れにも火にも強い鉄筋コンクリート製の建造物に惹かれていたりと考えることができ。それが仮に御不浄であっても、自分たちが出入り可能な居場所であり、確固たる存在感を持つものである限り、「コンクリートの便所」は尊いのだ。便所掃除のエピソードは、子供達の心が

震災によつて深く傷ついていることを暗示していると言つてよい。「コンクリートの便所」を偏愛する子供達は、「被災者」なのである。同じように、「浅草紅団」にしばしば登場する「浮浪人」も、もともと定まった住居や職業を持たなかつたわけではなく、震災によつて家族を失い、コミュニティを破壊され、社会関係資本を喪失して行き場をなくした「被災者」である。

たとえば、冒頭部近くにさりげなく書き込まれた「浮浪人」の姿にも、震災がくつきりと影を落としている。

瓢箪池の岸に人だかりがして、笑つてゐる。小春日和の日ざしが、それらの後姿を温めてゐる。だが、のぞいて驚いた。そこはちやうど瓢箪の結びに、あたつてゐて、池の中に小さい島があり、両岸から藤棚のあるある橋がかかつてゐる。その島の立花屋というおで

ん屋の前、枝垂柳の下の八つ手の傍に、大きい男が突つ立つて、池の麩を拾つて食つてゐるのだ。くるぶしの上まで水に入れながら、七尺ばかりの竹で水の上の麩を掻き寄せては、仁王立ちのまま、むしやむしや食つてゐるのだ。「ひでえ気違ひだな。鯉の上前をはねてやがる。」と、こちら岸ではまた大笑ひだ。十四五切れの麩をむさぼりつくすと、彼は素知らん顔で、おまけにまことに威風堂々と立ち去つてしまつた。

あまりにも常軌を逸したふるまいだが、飢えに耐えかねてということだけではなく、震災後という時空の中に身を置いて受けとめてみれば、そこにはさまざまな了解の糸口が見えてくる。地震で崩壊した凌雲閣を友人と二人で見物した「私」が、「上野の山の人々の噂」として、「浅草の十二階の塔」に登つていた見物客の

多くが地震の揺れで振り飛ばされ、瓢箪池に「うぼうぼ浮いてる」という話を伝えていた。十二階から転落した犠牲者であるかどうかはともかく、火災を逃れて

池や川で絶命したという悲劇は、吉村昭

の『関東大震災』（文藝春秋 一九七三

・八）に描かれている吉原の弁天池での惨事をはじめ、数多く報告されている。

池や川に浮かぶおびただしい溺死者たちの姿は、焼死して炭化したり白骨化した被害者たちの姿とともに、関東大震災の惨状を目の当たりにした人々にとつては忘れがたい映像だったに違いない。そのような光景の記憶が影を落としているはずの瓢箪池で、鯉に与えられた麩を食べる男の姿は、被災地東京の読者にとつては、尋常ではない衝迫力を持つものだっただろう。たとえば、震災直後に「池に遊べる鶴と家鴨とを食はしめし境遇の惨」を嘆き、「人肉を食はずんば生き難しとせよ」と叫んだ芥川龍之介が自殺せ

ずに「浅草紅団」を読んだとしたら、「麩を食う男」に「腑を食う男」を感じたかもしれないのだ。

桜の木の下には屍体が：

ソメイヨシノが生まれたのは、江戸末期のことだと言われている。種子で増えることがなく、接ぎ木でしか繁殖しないソメイヨシノは、すべて人工的に植樹されたものである。公園や学校、街路や河川敷など、都市空間を整備する事業を行った時にほぼ同じ樹齢の若木が植樹され、同じように育ち、同じように朽ち果てていく。一説には、樹齢はおよそ七十年と言われ、百年を超える老木はほとんど存在しないらしい。また、接ぎ木でしか繁殖しないクローン種であるために、気温や日照などが同じ環境であれば同時に花を咲かせる。東京学芸大学や国際基督教大学など、軍事施設があった場所をキャンパスに転用した大学に植えられたソメ

イヨシノは、戦後七十年を来年に控え、そろそろ天寿を全うする計算になる。

関東大震災における死者行方不明者は、十万人を超えと言われている。本所の陸軍被服廠跡だけでも三万八千人もの犠牲者が出ているという。おそらく大半の遺体は、葬儀らしい葬儀が執り行われることもなく埋葬されたはずである。もちろん懇ろに弔われた遺体もあつたに違いないが、全ての遺体を茶毘に付して墓地に納骨することは困難だったはずで、穴を掘って「仮埋葬」された身元不明の犠牲者も多かつたに違いない。どのような場所に「仮埋葬」されたのか、詳しいことはよくわからないが、避難場所としても使われたような広い遊休地や公園の一角などが選ばれた可能性が高い。防災目的を兼ねて整備された震災復興公園や復興小学校の敷地も、震災時には遺体が運び込むために使われた土地だったのかもしれない。

そのような想定の下に梶井基次郎の「桜の樹の下には」〔詩と詩論〕一九二八・一二〕を読むと、桜の美の中に惨劇を幻視した散文詩であるというような「抽象的な」解釈では済まないものが感じられる。これはじつは、事実をありのままに語っただけの単なる「散文」に過ぎないのでないかと思えてくるのだ。

桜の樹の下には屍体が埋まつてゐる！

これは信じていいことなんだよ。何故つて、桜の花があんなにも見事に咲くなんて信じられないことぢやないか。俺はあの美しさが信じられないので、この二三日不安だつた。しかしいま、やつとわかる 때가来た。桜の樹の下には屍体が埋まつてゐる。これは信じていいことだ。

震災の年に京都にいた梶井基次郎は、

震災翌年の一九二四（大正13）年に東京に転居している。そんな梶井基次郎が関東大震災の五年後に発表した「桜の樹の下には」ではあるが、東日本大震災から三年あまりを経た時点に立つ私には、この「散文詩」が震災後文学に見えている。岩手からも宮城からも福島からも離れた場所所で生きて来た私の実感からすると、震災当日に被災地から遠く離れた京都にいたとしても、時間的に五年の隔たりがあつたとしても、震災が梶井基次郎の精神に影を落とすということは、十分にあり得ることだと思えるのだ。もちろん、メディアを通して伝えうる情報の質は、当時と今とはまったく異なる。しかし一方で、被災地の外に留まり続けている私とは異なり、梶井基次郎が被災地である東京に移住していることは見逃せない。あちこちに震災の傷跡を残しながらも、復興への歩みを始めていたはずの東京で、いったい何を見て、どのような話を聞いたのか。噂話の類いを含め、関東大震災の生々しい記憶が、梶井基次郎の精神に何らかの影を落としていたに違いない。だとすれば、震災後に順次整備されていった震災復興公園などに新たに植えられたソメイヨシノから受け取ったヴィジョンが、「桜の樹の下には」という特異な表現に結実した可能性を指摘することができる。そして、「桜の樹の下には屍体が埋まつてゐる！」などと書けたのは、梶井基次郎が震災の当事者ではなく、被災地外から来た余所者だったからなのではないかということも、付言しておく必要があるだろう。

（のなか・じゅん）